

# 中国語動詞「上」の意味カテゴリーと意味拡張のプロセスについて

苗 茨

日本経済大学

## 要旨

中国語「上」は名詞としても、動詞としても多岐な意味用法を持つ。本稿は動詞「上」の意味カテゴリーについて分析し、22種のカテゴリーに分類した。従来の研究、辞書の意味項目では提起されていない「特定の目的で、ある場所に取り付けられる」義（上膛）、「感情の昂揚」義（上火儿）、「数値、数量の増加」義（血压上来了）、「物や人の状態が変化する」義（上瘾）の4種が独立した意味として成立すると主張する。また、「意味拡張モデル」を用いて、「上」の意味拡張のプロセスを「スキーマによる意味拡張」と「背景的意味による意味拡張」に分け、さらなる意味拡張メカニズムの解明を試みたい。

キーワード：意味拡張モデル、スキーマ、メタファー、メトニミー、シネクドキー

## 0. はじめに

中国語の動詞“上”は方位名詞“上”の意味に基づいた意味用法を持っている。方位名詞としての“上”のプロトタイプ義（基本義）は、「位置的に高いところ」であるが、動詞“上”は「高いところへ移動する」ことを表わす意味をプロトタイプ義にしている。この基本義から様々な意味が派生されるが、意味用法と意味拡張にプロトタイプ義との関連性が観察される。動詞“上”のそれぞれの意味における表現の特徴、及びプロトタイプ義との種々の関連性によって、動詞“上”の持つ意味をカテゴリー化し、これらの意味カテゴリーのメカニズムを解明することが本稿の目的である。

## 1. 先行研究

初山洋介氏は「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」<sup>1</sup>で、Langackerが主張する「ネットワークモデル」と国広哲弥氏が主張する「現象素」<sup>2</sup>を統合した「意味拡張モデル」を提唱している。主な論点を以下にまとめる。

a スキーマとは、それが規定するカテゴリーのすべてのメンバーに完全に適合する抽象的な特性表示である。

b スキーマとそれが規定するカテゴリー（プロトタイプ義を含む）とは、「特殊化」(Specialization) 或いはその逆の「抽象化」(Abstraction) の関係にある。即ち、シネクドキーに相当するものである。

c スキーマが規定するカテゴリー間の関係は、スキーマを類似点にしたメタファーの関係である。(以上は、**初山 2001 : 37-39** を参照)

d 現象素とは、「ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えること」を指す。語の「現象素を色々な角度から捉えたり、焦点を絞ったりすること」によって、多義が発生する。このような意味カテゴリー間の関係はメトニミーに相当するものである。(初山 2001 : 40 を参照)

なお、本章では、意味を色々な角度から捉えたり、焦点を絞ったりすることを、「背景の意味の前景化」、「活性化」と呼ぶことにする。

e 多義語の意味拡張モデルは、スキーマによるメタファー的、シネクドキー的意味拡張と現象素(本章では、「背景の意味」)によるメトニミー的意味拡張のネットワークを統合した意味拡張分析メカニズムである。

以下、中国語の動詞“上”の意味拡張についての分析を行なう際、初山氏の主張を援用することにする。

## 2. 中国語の動詞“上”の意味カテゴリー及び意味用法の特徴

本節では、中国語動詞“上”に含まれる複数の独立した意味のカテゴリー化を試みる。筆者は8種の辞書(『中日辞典』『現代漢語詞典』『動詞大辞典』『中国語常用動詞例解辞典』『中日大辞典・増訂第二版』『中華古漢語字典』『中国語大辞典』、『漢語大詞典』)<sup>3</sup>の動詞“上”及び“上”を伴う表現の意味用法の語釈を調べ、“上”の意味カテゴリーを以下のように22種に分類してみる。

- (1) 高く移動する
- (2) 重要視される場所、方向へ移動する
- (3) ある場所へ移動する
- (4) 難関に立ち向かう
- (5) 特定の場に身を置く
- (6) 規定の時間に経常的な活動につく
- (7) 乗り物に乗る
- (8) 紙面に載る
- (9) 公開の場に出る
- (10) 特定の目的で、ある場所に取り付けられる
- (11) 上位の人に引き渡す
- (12) 上級の組織や人物に提出する
- (13) 感情の昂揚
- (14) 数値、数量の増加
- (15) ある数量、程度に達する
- (16) 取り付ける

- (17) 表面につける、塗る
- (18) 加える、ほどこす、増す
- (19) 締める、巻く
- (20) 罣に引っかかる
- (21) 物や人の状態が変化する
- (22) 目上、年配者の行為を指す

以下、上記の 22 種の意味用法について、現代中国語の用例を通して考察し、動詞“上”を伴う表現の各意味用法の文法的特徴、修辭的特徴、及び各派生義のプロトタイプ義との関連性を考えることにする。

(1) 「高く移動する」義

「高く移動する」とは、主体が低いところから高いところへの空間的な位置変化をすることを指す。これが動詞“上”のプロトタイプの意味でもある。

古代中国語の例において、“上于天”のように「上+介詞+場所」の形と“上长安城”のように「上+場所」の形が見られる。現代中国語においても、上記の二種の構文構造が見られる。両方の間に、意味上の違いがあるか、次の例を通して考えることにする。

○ 上到高处眺望，莽莽苍苍，景物若沉若浮。（高いところに登って眺めると、景色は蒼茫として現れたり、消えたりした）

この例において、“上”の後に“到”が続き、“高处”は“上”という動作の到達する場所を表わす。

○ 当日上中天时，他发现自己还没整理好行囊。（正午頃、彼はまだ荷造りができていないことに気づいた）

上記の例では、“到”という表現は用いられていないが、場所名詞はあるスポットを表わすものであるため、前の例と同様に、動作の到達点を表わしているものと見てよい。

○ 李时珍从小受父亲的影响，常常跟小伙伴一起上山采集各种药草。（李時珍は小さいころから、父親の影響を受け、いつも仲間と共に色々な薬草を採るために山に登っていた）

以上の例において、“上”に後続する“山”は動作発生の場所を表わす。この場合、前の例と違って、場所を表わす名詞は、スポットではなく、ある種の範囲を表わす。動作主はどこまで移動したかは明示されていない。そのほか、“上房”（屋根に上がる）、“上树”（木に登る）、“上山”（山に登る）、“上坡”（坂を上がる）などの表現もそれである。

また、「上+（“来”、“去”などの）趨向補語」のような表現がある。次の例を見よう。

○ 人们结成3人一组，你上来，他下去，轮流入水。（3人が一組となって、一人があがったら、別の一人が入るというぐあいに、交代で河に入った）

上記の例では、到達する場所は明示されていないが、しかし、主体が高いところへの移動という方向性は明示されている。また、“来”や“去”の後続によって、その移動は

発話者に接近してくるものであるか、遠ざかっていくものであるかは、はっきりしている。

## (2) 「重要視される場所、方向へ移動する」義

都城、寺社、墓地のような場所、北や川の上流などの方向に向かって進行することを指す。プロトタイプ義の高所への移動から派生し、主体が現在地から離れ、重要と思われるほかの地点に赴くということを表わす。

中国古代から、北の方は「上」とされてきた。北方に行くのは“北上”、南方に行くのは“南下”と言う。また、川を溯って行くのは“上”、川を下って行くのは“下”というところから、揚子江の上流にある場所に行くのは“上”、下流にある場所に行くのは“下”で表現される。

下記の例のように、“北上”は現代中国語でも使用される。

○ 周恩来代表党中央提出北上陝、甘，建立革命根据地。（周恩来は党中央委員会を代表して、北にある陝西、甘粛に行き、革命的根拠地を樹立するよう、提案した）

特定の場所として、例えば、都城のほうに向かうのは、“上”と言う。都はその国の政治、文化の中心であり、統治者の居場所でもあるため、都のある場所はほかの場所より重要であるという認識が普遍的に存在するからであろう。現代中国語では、鉄道の方向を表わす場合、その名残りとして首都北京へ向かう列車は“上行列车”（登りの列車）と言い、北京から各地へ向かう列車は“下行列车”（下りの列車）と言う。

方向以外に、次の“上庙”、“上坟”のような例も見られる。

また、“上法院”（裁判所に行く）からは、役所や裁判所は国家機関として重要視されていることが窺える。その他の“上一号”（トイレに行く）、“上门”（人の家を訪ねる）、“上街”（街へ出かける）の表現においても、移動の目的地は日常生活の中で欠かせない場所や特別である場合である。これらの表現のもう一つの特徴は、いずれも慣用表現として固定されており、その上、“上法院”は「裁判を起こす」こと、“上一号”、“上厕所”は「用を足す」こと、“上街”は「買い物する、遊ぶ」こと、“上门”は「人の家を訪ねる」を意味するように、主体が到達点まで移動するという行為を表わすだけでなく、到達点へ移動する行為の目的が強調される。

## (3) 「ある場所へ移動する」義

現在地を離れ、ほかのどこかへ赴くことを指す。(2) で述べてきた基本義から意味(2)の「重要視される場所、方向への移動」が派生してきたが、現代中国語では、目的地が重要視されるかどうかは関係なく、“上”が「ある場所への移動」の意味として用いられることが多く見られる。これは意味(2)「重要視される場所、方向への移動」義から更に派生されてきたものと思われる。

この場合、“上”に後続するものは、場所を表わす名詞、代名詞なら、すべて共起することができる。構文形式としては、次のように【“上”＋場所】や【“上”＋場所＋“去”／“来”＋（目的）】の形が見られる。

○ 营业照啊, 上工商管理那儿。(営業許可書か、それは工商管理へ行かなくちゃ)

○ 这戏有看头, 您要花钱上电影院瞅瞅, 保证不会觉得吃亏。(この映画は見る価値がある。お金を払って映画館に行ってみれば、絶対に損はしないよ)

○ 您是替昨天上这儿来的那位小姐取的东西吧?(あんたは、昨日来たお嬢さんの荷物を、とりにきたんですね)

○ 我反正不上她那儿去买东西。(どうせ彼女の店に買い物には行かない)

上記の例はいずれも【“去” / “来” + 場所】の表現に言い換えてもよいが、【“去” / “来” + 場所】構文より、移動の目的はより強調されているというニュアンスが窺える。

#### (4) 「難関に立ち向かう」義

この意味では、“上”は何らかの問題の解決、目的の達成など目標に向かって前進することを指す。

○ 好容易到了大庆油田, 能不上? 上, 有困难; 不上, 就更困难。(やっと大慶油田にたどり着いたから、なぜがんばらないの? がんばれば、困難に直面しなければならないけど、がんばらなければ、もっと多くの困難に出会うには違いない)

○ 没条件也要上。(条件が揃わなくても、取りかかって行かなければならない)

○ 见困难就上。(困難に出会えばなお進む)

上記の三例では、目標は「困難を克服する」、「目的達成」など抽象的なものになる。この場合の“上”には、「困難」を前にして、しり込みせず、それに直面して、真正面からぶつかっていき、挑戦する、立ち向かう、戦うなどの意味合いが強い。

なお、“走上前、迎上去”(向かっていく)などの表現も何かの目標に向かって、目的を持って移動していくことを表わす。この場合“上”は方向補語であり、動詞ではないが、移動の目的性を重視する点において、意味(4)の動詞“上”と同様である。

この意味での表現には、構文上、“上”には場所を表わす目的語が見つからないという特徴が見られる。

#### (5) 「特定の場に身を置く」義

ある特定の場所に移動することによって、その場所に相応しい何かの行為をすること、またはその場に姿を現すことを指す。“上台”(就任)、“上台”(舞台に上がる)、“上场”(登場、出場)、“上网”(インターネットに接続する)のように、スポーツの試合の場所、舞台、役職のポスト、戦場などの場所は、選手、役者、役人、軍人がそこに身を置くこと、姿を現すことは、単なる「移動」という行為ではなく、特定の任務を果たすという目的が含意される。すなわち、こういった【“上” + 空間名詞】の表現は、すでに、「演技をする、試合をする、職務を始める、インターネットをする、戦う、旅をする」という意味で慣用表現として定着している。

#### (6) 「規定の時間に経常的な活動につく」義

日常的に定刻に活動を開始することを指す。“上岗”(仕事を始める)、“上班”(仕

事に行く、出勤する)、“上课”(授業に行く、授業をする)、“上大学”(大学に行く)、“上操”(訓練をする)、“上活”(仕事に行く)、“上哨”(歩哨に立つ)などがあるが、意味(5)と同様に、移動の到達点が“上”の目的語として明示される。ただし、具体的な場所名詞ではなく、移動の目的を表わす抽象的名詞が“上”の目的語になっている。この場合の移動は、単にその場所に赴くという行為ではなく、何らかの義務、責任を持って、活動をするという要素が含意される。

#### (7)「乗り物に乗る」義

車、船などの交通手段(乗り物)、或いは馬などの動物に乗ることを指す。これはプロトタイプ義である「高く移動する」義から派生してきた意味と考えてよい。従来の研究や辞書では、「高く移動する」義のカテゴリーに分類されるのが普通であるが、ここで、独立した意味カテゴリーとして認めるべきだと主張する理由は、次の通りである。

まず、移動の到達点という視点から見よう。この類の用例としての“上车”(車/列車に乗る)、“上飞机”(飛行機に搭乗する)、“上船”(舟に乗る)、“上轿”(かごに乗る)、“上马”(馬に乗る)などでは、“上”という移動は目的語である「道具の上部」に至るのは、“上马”の表現だけであり、そのほかの表現はいずれも、交通道具の内部の空間までの移動である。そのものの上に移動するより、そのものの利用ができる状態になることが強調されている。

次に、移動の方向性から見てみよう。“上船”を例にすれば、「船に乗る」という事象において、動作の到達する場所「フネ」は陸地より高く見えることから、“上”を使って表現すると連想しやすいが、「フネ」は、大きくて高い高級客船もあれば、より低いところにある小舟もある。また、深海に潜る潜水艦であっても、中国語では同じく、“上”が使用され、“下潜水艇”のような表現で表現することはまずない。この点から、「乗り物に乗る」義の“上”は、既に縦の方向性を持つ「高く移動する」義から離れており、目的重視の「移動」義として確立していることが分かる。

#### (8)「紙面に載る」義

文字、絵、図表、或いは記事などが紙面(新聞、雑誌、書籍など)に載ることを指す。次の例を見よう。

空間名詞としての“上”の到達点は、「ものの表面」も含まれる。紙面に現れることは、一種の「移動」とも見ることができ、その移動の到達点は紙の表面だと言える。これらの表現はいずれも、主体が紙面に載ることによって、公開され、或いは人々に知られることになることを表わすが、その結果は微妙に異なっている。“上账”(記帳する)、“上了书”(書面に載る)、“上报纸”(新聞に載る)などは記録を残すことを強調しているが、“上榜”(ランク入り、合格者として掲示される)、“上光荣榜”(表彰掲示板に出される、載る)、“上黑名单”(ブラック・リストに載る)などはある種の資格、或いは特性が認められることを強調している。

(9)「公開の場に出る」義

公開の場所に出ることを指す。これによって人々は見るとなり、手に入れるなり何らかの手段でアクセスすることができるようになる。“上市”（売り出される）、“上架”（棚に載せる、入れる）、“上映”（上映する）、“上演”（上演する）などはそうであるが、“上”の目的語は主体が移動する到達点であり、“上架”、“上市”は市場、映画館など公開の場所で、“上演”、“上映”その移動によって、人々が主体の商品、劇、映画などを買うなり、見るなり、アクセスできるようになる。主体の移動は具体的空間移動ではなく、抽象的移動である。

(10)「特定の目的で、ある場所に取り付けられる」義

ある場所（主に道具類、身体部分である）に取り付けられることによって、使用できる状態になることを指す。次の例を見よう。

“上身”（着用する）、“上脚”（履く）、“上秤”（重量を量る）、“上膛”（装填される）、“上灶”（かまどで焼く）のような表現では、“上”に後続するものは移動先の場所と見てもよいが、主体が取り付けられる「対象」と見てもよい。その移動がその場所に到達すること、或いはその対象に取り付けられることによって、主体がある種の機能を果たすことができるようになる。例えば、“上灶”は、食材がかまどに置かれることであるが、この移動によって、食材が加熱されて、食べられるようになることを意味する。“上身”は、新しい服を初めて身につけることを表わす。

また、“上”の主語は位置変化の主体であるが、その位置変化は主体以外の存在（主に人物）の働きによるものである。

(11)「上位の人に引き渡す」義

“上菜”（料理を出す）、“上茶”（お茶を出す）、“上烟”（タバコをさしあげる）、“上酒”（酒をすすめる）、“上礼”（贈り物をする）のように、“上”の被動作主（移動主体でもある）が比較的地位の高い人に向けて移動することになる。

また、租税の納入、供え物をする、貢ぎ物の進呈などは、物は上級機関、上位の人物のほうに移動するものであるため、“上税”（税金を納入する）、“上香”（お香をあげる）、“上貢”（貢ぎ物をする、朝貢する）、“上供”（供え物をする）などで表現される。“上供”は元々「神仏に供え物をする」ことを意味するが、転じて「目上の人や実力者に賄賂か礼を贈る」ことを言う場合もある。

(12)「上級の組織や人物に提出する」義

上の組織や人物へ書類を提出し、自分の考えを述べることを指す。例えば、“上报”は上級機関に報告すること、“上书”は意見書を政府機関や上司に提出することを指す。そのほか、“上疏” / “上本”（上奏する）、“上意见书”（意見書を上呈する）などがあるが、いずれも、書類など書面のものが上位にあると思われている機関や人物に向けて提出されることを示す。

(13)「感情の昂揚」義に

気持ちが高ぶり、或いは精力が注がれることを指す。“上火”（カッとする）、“牛脾气上来”（頑固として融通がきかない）“上劲”（気合いが入る）のように、気持ちの高ぶりを表わすものが多い、抽象的な移動（変化）とも言える。

#### （14）「数値、数量の増加」義

数値、数量が増えることを指す。例えば、“成绩上来了”（成績がよくなった）、“血压上去了”（血圧が上がった）、“产量上来了”（生産高が増えた）では、主体となるのは、“成绩”、“血圧”、“产量”など数値で存在の状態を表わす抽象的な概念であり、数値、数量が増えることは、具体的な空間移動と違って、抽象的・概念的な変化であるが、空間領域における位置の変化が抽象的な概念領域へ投射されたものと見なされる。量の多いことは「高い」と見られ、量の少ないことは「低い」と見られ、“上”は抽象的な空間移動になる。

#### （15）「ある数量、程度に達する」義

基準とされるレベルに達することを指す。“上规模”（一定の規模になる）、“上水平”（一定のレベルに達する）、“上档次”（高いランクに入っている）、“上年纪”（相当の年齢になっている）などは、後続する名詞は数量を表わすものではなく、数量で示される意味範疇のものである。“上”によって、相当のレベルに達していることが表わされる。

#### （16）「取り付ける」義

部品など比較的小さいものを、機械など大きなものに取り付けることを指す。“上螺丝”（ねじを締める）、“上子弹”（銃弾を装填する）、“上刺刀”（銃剣をつける）、“上领子”（襟を縫い付ける）、“上袖子”（袖を縫い付ける）、“上鞋底”（靴底を表に縫い付ける）、“上纱窗”（網戸をとりつける）、“上箍”（たがをはめる）、“上枷”（首かせをかける）、“上龙头”（蛇口を取り付ける）、“上板”（戸締りする、店じまいをする）、“上闩”（戸にかんぬきをかける）などがそれぞれである。部品類のものは“上”の目的語として明示される例が多く見られる。一方、“上门”（戸締まりをする、店を閉まる）、“上鞋”（靴の表と靴底を縫い付ける）、“上灯”（灯をともす）では、部品が取り付けられる場所が明示され、部品類の道具は省略される。この場合の“上”は、部品を取り付けることによって、そのものの整備が完成されることが強調されている。

#### （17）「表面につける、塗る」義

液体、膠質状の物質を表面に塗ることを指す。“上药”（薬を塗る）、“上漆”（漆を塗りつける）、“上釉”（釉薬をかける）、“上妆”（舞台のための化粧をする）、“上腻子”（パテをつける）などでは、移動の主体は“上”の目的語となり、移動先は塗る場所、或いは塗る対象としても解釈できる。方位詞“上”の「物体の表面」という意味とも関係するが、ものの表面に塗られ、そこに存留して離れないことが強調される。

#### （18）「加える、ほどこす、増す」義

数量的に少なくなっている状況の中で、それを添加して、量を増やすことを指す。“上货”（入荷）、“上草”（馬や牛に飼い葉をやる）、“上水”（水を補給する）、“上油”（ガソリンを補給する）、“上肥”（肥料をやる）、“上粪”（肥料をやる）などがそれである。これは増やしたことに



よって、全体の量が多くなる。つまり、数量が上がることからの連想だと考えられる。量の変化を位置変化と見なし、変化の結果を移動の到達点と見なしているので、移動の到達点での存留が強調されている表現である。

(19)「締める、巻く」義に

ゼンマイのようなものをしっかりと巻くことを指す。“上弦”、“上表”、“上钟”（時計のゼンマイを巻く）、“上发条”（ゼンマイを巻く）などでは、“上”は「ゼンマイを巻く」という動作を表わすが、機械類のものがきっちりと作動し、緊張状態を保つという意味が含まれる。

(20)「罾に引っかかる」義

主体がある特定の場所、道具まで移動しその場所（道具）に引っかかって、離れられないことを指す。“上当”、“上套”、“上圈套”（だまされる）、“上网”（網にかかる）、“上钩”（罾にはめられる）などの表現は“上当”を除いて、“上网”、“上钩”、“上套”、“上圈套”は魚や野獣が罾にかかるという具体的な事柄からきた比喩的な表現で、罾にはまって、不利な立場に置かれてしまうことを表わす。その結果は主体にとって不本意で、マイナス的なものになる。

(21)「物や人の状態が変化する」義

物理的、生理的、心理的な変化が起こり、その変化後の状態が継続していることを指す。“上锈”（錆びつく）、“上冻”（凍りつく）、“上火”（のぼせる）、“上瘾”（夢中になる）のような表現は状態の変化を表わしている。そのうち、“上锈”、“上冻”は物理的状态の変化を表わし、“上火”、“上瘾”は人の生理的、心理的变化を表わすものである。

(22)「目上、年配者の行為」義

発話者から尊敬すべき人物の行為を“上”を持って表現することを指す。“请万岁爷上膳”（王様、ご飯をお召し上がりくださいませ）、“请您上上眼”（お目にかかりたいです）のような表現では、「動作の方向性」という点において、ほかの意味と異なって、上位にある人物の動作を表わしている。“上膳”は少し古びた使い方で、現代中国語では、とりわけ口語として用いられる例は少ない。“上眼”は方言であり、使用頻度は高くない。これは、方位詞としての“上”において言及した“上谕”（詔書）などの用法に似ている。

### 3. “上”の意味拡張ネットワークに関する考察

本節では、初山氏（2001）が提唱した「多義語の意味拡張モデル」の主張を援用して、動詞“上”の複数の意味カテゴリーの意味拡張関係を明らかにし、その意味拡張メカニズムを明確にしようとするものである。

(1) 中国語の“上”におけるプロトタイプの意味

多義語のプロトタイプの意味は、「意味カテゴリーの中で、最も確立されていて、認知の際立ちが高く、また、最初に習得され、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有するものを指す」と、初山氏が定義している<sup>1</sup>。この定義によって、

動詞“上”のプロトタイプ的意味は、「高く移動する」という意味であることが分かる。したがって、そのほかの 21 種の意味用法は“上”の拡張義と見ることになる。

移動動詞“上”は、方位名詞“上”から確立した用法と筆者は思う。方位名詞“上”のプロトタイプ義は「空間的により高い位置」である。そのため、到達点が「空間的に高い位置」である移動という事象を表わすには、動詞“上”が用いられることになったと考えられる。「移動」という事象は、その過程として、出発点から離れて、一定の経路、時間を通し、到達点にいたるといった段階が見られるが、それぞれの段階では、どんな様態で動作をしているのか、その動作が対象を持っているのかなど、様々な要素が含まれる。しかし、“上山”、“上楼”などのような動詞“上”の用例では、移動という事象に含まれる各段階と要素が背景化され、その過程の一部である「到達」という局面にだけ、焦点を絞って表現しているのである。

また、プロトタイプの“上”の「移動」は、ある種の「変化」でもあることを認めなければならない。即ち、“上”の意味範疇に、「変化」ということは背景化されているのである。

## (2) 中国語の“上”におけるスキーマによる意味拡張

次に (I) (II) (III) (IV) に分け、中国語の“上”におけるスキーマによる意味拡張を説明することにする。

### (I) “上”のスキーマの規定

初山氏の意味拡張モデルは、Langacker のネットワークモデル（メタファー関係、シネクドキー関係）と国広の現象素（メトニミー関係）を統合したモデルである。したがって、Langacker から「それが規定するカテゴリーのすべてのメンバーに完全に適合する抽象的な特性表示である」と定義される「スキーマ」は、多義語のすべての意味カテゴリーが有する抽象的特性ではなく、メタファー関係とシネクドキー関係によって、拡張されてきた意味カテゴリーのメンバーだけ共有する抽象的特性であることになる。即ち、スキーマはそれを共有する意味カテゴリーとの間には、上位類と下位種の関係（シネクドキー《提喻》的關係）にあり、その下位にある各意味カテゴリーの間には類似関係（メタファー《隠喩》的關係）にある。

そこで、“上”のプロトタイプ義から抽象的特性を抽出してみると、「低いところから高いところへ」という要素が際立ってきたのである。ここで、この意味要素を動詞“上”のスキーマとする。

### (II) メタファー（隠喩）的拡張義

前項で、「低いところから高いところへ」という抽象的特性を動詞“上”のスキーマと規定した。このスキーマを類似点とし、これに基づいた意味拡張プロセスは、メタファー的拡張であり、そこから確立した意味カテゴリーは、メタファー的意味になる。“上”のプロトタイプ義「高く移動する、移動させる」から、メタファー的拡張をしてきた

張義は、13 種あり、更に 5 つの意味群に分けることができる。

意味群 A : 意味 (2)、意味 (4)、意味 (5)、意味 (6)、意味 (7)

意味群 B 意味 (8)、意味 (9)、意味 (10)

意味群 C 意味 (11)、意味 (12)

意味群 D 意味 (13)

意味群 E 意味 (14)、意味 (15)

これらの意味カテゴリーは、プロトタイプ義との間に、「低いところから高いところへの移動」という類似点で共通している。ただし、プロトタイプ義では、動作主、或いは被動作主が実際に高い場所、その方向に向けて移動するが、拡張された 13 種の意味では、動作主、或いは被動作主の移動は、人間の心理的に「高い」と認識される場所へ移動するのである。即ち、プロトタイプ義の物理的移動から、心理的移動に拡張されている。

**意味群 A : 意味 (2)、意味 (4)、意味 (5)、意味 (6)、意味 (7)**

意味群 A の意味カテゴリーは、メタファーの意味で、“上”の主体は移動の主体と一致しており、能動的な移動を表わす表現からなる。心理的に「高い」場所へ移動することを意味するものである。意味 (4) を除いて、移動という事態における要素の中で、「到達点」というのが前景化されており、それを表わす場所名詞などは、構文上、“上”の目的語として明示されている。意味 (4) の表現は、移動の方向（経路）が強調され、到達点が明示されないが、コンテキストによって、背景化されている到達点の存在が、意識されることが可能である。そしてこの意味群では、“上”（移動する）の動作主は、人など有情物であり、「移動」は動作主の内在的意欲によってなされるもので、意図性を持っている。なお、意味群 A の各意味カテゴリーの意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りになる。

表 1 “上”の意味群 A の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	スキーマ的意味の有無	背景的意味の前景化	“上”の他/自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の類型
(意味 2) 重要視される場所、方向へ移動する	○	移動の到達点	自動性動詞	移動の到達点	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 4) 難関に立ち向かう	○	移動の方向(経路)	自動性動詞	×	(意味 1)からのメタファー的意味拡張

(意味 5) 特定の場に身を置く	○	移動の到達点	自動性動詞	移動の到達点	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 6) 規定の時間に経常的な活動につく	○	移動の到達点	自動性動詞	移動の目的	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 7) 乗り物に乗る	○	移動の到達点	自動性動詞	移動の到達点	(意味 1)からのメタファー的意味拡張

**意味群 B 意味 (8)、意味 (9)、意味 (10)**

意味群 B の意味カテゴリーは、メタファー的意味で、“上”の主体は移動の主体と一致しているが、受動的な移動を表わす表現からなる。

これらの表現において、主体の移動によって、到達点についた後に果たせる機能、すなわち、その移動の目的が強調される。主体移動の到達点が前景化されており、到達点はいずれも心理的「より高い」場所である。この点において、“上”のスキーマ「低いところから高いところへ」と一致し、これを類似点に、プロトタイプの「高く移行する」義から、メタファー的に拡張されてきた意味群になる。

意味群 B の各カテゴリーの意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りとなる。

表 2 “上”の意味群 B の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	スキーマ的意味の有無	前景化された意味	他 / 自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の類型
(意味 8) 紙面に載せる	心理的「高くへの移動」	移動の到達点	自動性動詞	移動の到達する紙面類	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 9) 公開の場に出る	心理的「高くへの移動」	移動の到達点	自動性動詞	到達点の公開の場所	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 10) 特定の目的で、ある場所に取り付けられる	心理的「高くへの移動」	移動の到達点	自動性動詞	到達の場所、道具	(意味 1)からのメタファー的意味拡張。(時間的隣接性に基づくメトニミー的表現)

**意味群 C 意味 (11)、意味 (12)**

意味群 C の意味カテゴリーは、メタファー的意味で、“上”の主体は移動の主体と異なり、それを移動させるという能動的な行為を表わす表現からなる。

この類の表現における“上”は他動性を持っており、その目的語になるモノを、ある場所、人物に運ぶ、渡す、出すことを意味する。即ち、主体の移動という事態が「高いところへ」という特性を持ち、“上”のプロトタイプ義と類似している。しかし、この2義では、他動詞“上”が主体を高く移動されるという行為を表わし、一種の使役と見てよい。更に“上”の他動性によって、主体移動の原因となる人物が心理的に、到達点となる場所、人物より「低い」ところにあるという背景の意味が認識されることになる。なお、意味群 C の各意味カテゴリーの意味構造と構文構造を表3でまとめておく。

表3 “上”の意味群 C の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	スキーマ的意味の有無	背景的意味の前景化	“上”の他/自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の類型
(意味 11) 上位の人に引き渡す	○	移動の方向、到達点	他動性動詞	移動の主体	(意味 1)からのメタファー的意味拡張
(意味 12) 上級の組織や人物に提出する	○	移動の方向、到達点	他動性動詞	移動の主体	(意味 1)からのメタファー的意味拡張

**意味群 D 意味 (13)**

意味群 D の意味カテゴリーは、メタファー的意味で、“上”の主体は感情を表わす表現である。この類の“上”は、人間の感情的な変化を表わすものである。「気持ちは心という容器中の内容物である」というメタファーは、Lakoff and Johnson (1980)<sup>4</sup>によって提起されている。「感情が昂揚する」という抽象的な事態を「高く移動する」という具体的な事態に喩えていると見ることができ、「低いところから高いところへ」という動詞“上”のスキーマが類似点になるプロトタイプ義からのメタファー的意味拡張であると言える。そして、気持ちは「低いところから高いところへ」変化すると見なすが、「高いほうへ」という方向性だけが強調されている。即ち、その移動の出発点と到達点が背景化されており、移動の方向（経路）が前景化されている。

意味群 D の意味構造と構文構造の特徴は、表 4 のようにまとめることができる。

表 4 “上” の意味群 D の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上” のスキーマ的意味の有無	背景的意思の前景化	“上” の他/自動性	“上” の目的語の意味	意味拡張の種類
(意味 13) 感情の昂揚	○	移動の方向	自動性動詞	×	(意味 1) からのメタファー的意味拡張

**意味群 E 意味 (14)、意味 (15)**

意味群 E の各意味カテゴリーは、メタファーの意味で、“上” の主体は移動の主体と一致しており、抽象的なものの移動を表わす表現からなる。数値、数量が増加することは、心理的に低いところから高いところへの移動、そして、一定の基準に達していることが最も強調されていることが見られる。即ち、このメタファー的意味拡張において、プロトタイプ義の背景義としていた「移動の到達」が最も活性化されているのである。意味群 E の意味構造と構文構造の特徴を表に示すと、次の通りになる。

表 5 “上” の意味群 E の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上” のスキーマ的意味の有無	背景的意思の前景化	“上” の他/自動性	“上” の目的語の意味	意味拡張の種類
(意味 14) 数値、数量の増加	○	移動の方向	自動性動詞	×	(意味 1) からのメタファー的意味拡張
(意味 15) ある数量、程度に達する	○	移動の到達点	自動性動詞	×	(意味 1) からのメタファー的意味拡張

(Ⅲ) シネクドキー (提喩) 的拡張義

次に、意味 (3) を意味群 F として、考えてみることにする。

**意味群 F 意味 (3)**

意味群 F の意味カテゴリーは、シネクドキー的意味で、“上” の主体は移動の主体と一致しており、能動的な移動を表わす表現からなる。意味 (3) はそれである。

意味（3）「ある場所へ移動する」義。

○ 您这是上哪儿啊？（どちらへおいででしょうか）

意味カテゴリー	“上”のスキーマ的意味の有無	背景の意味の前景化	“上”の他/自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の種類
（意味3）ある場所へ移動する	○	移動の到達点	自動性動詞	移動の到達する場所	（意味2）からのシネクドキー的意味拡張

この意味の用例は、【“去/来”＋場所】の表現に言い換えても、ほとんど同様の意味になる。したがって、“去/来”と共起できる「場所」を表わすものであれば、ほとんど“上”に後続するものとして許容でき、特に制限されない。即ち、ここで、“上”の「移動」義が見られるが、高い場所への移動に限られていない。これは意味（2）「重要視される場所、方向へ移動する」が一般化されて、拡張してきたものだと筆者は思う。意味（2）は特定の移動であり、意味（3）は「一般的」の移動と言える。この2つの意味カテゴリーの間は、下位種と上位類の関係にあり、シネクドキー的意味拡張である。

なお、意味（3）を意味群 F としての意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りになる。

表6 “上”の意味群 F の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

#### （IV） スキーマによる“上”の意味拡張ネットワーク

以上のように、動詞“上”のプロトタイプ義からメタファー的關係をもとに拡張された8種の拡張義を3つの意味群に分けて分析した。また、意味（2）からシネクドキー的關係をもとに拡張された意味（3）についても検討した。ここで、これらの意味カテゴリーの間の拡張ネットワークを図2の通り、まとめておくことにする。

図1 スキーマによる“上”の意味拡張ネットワーク

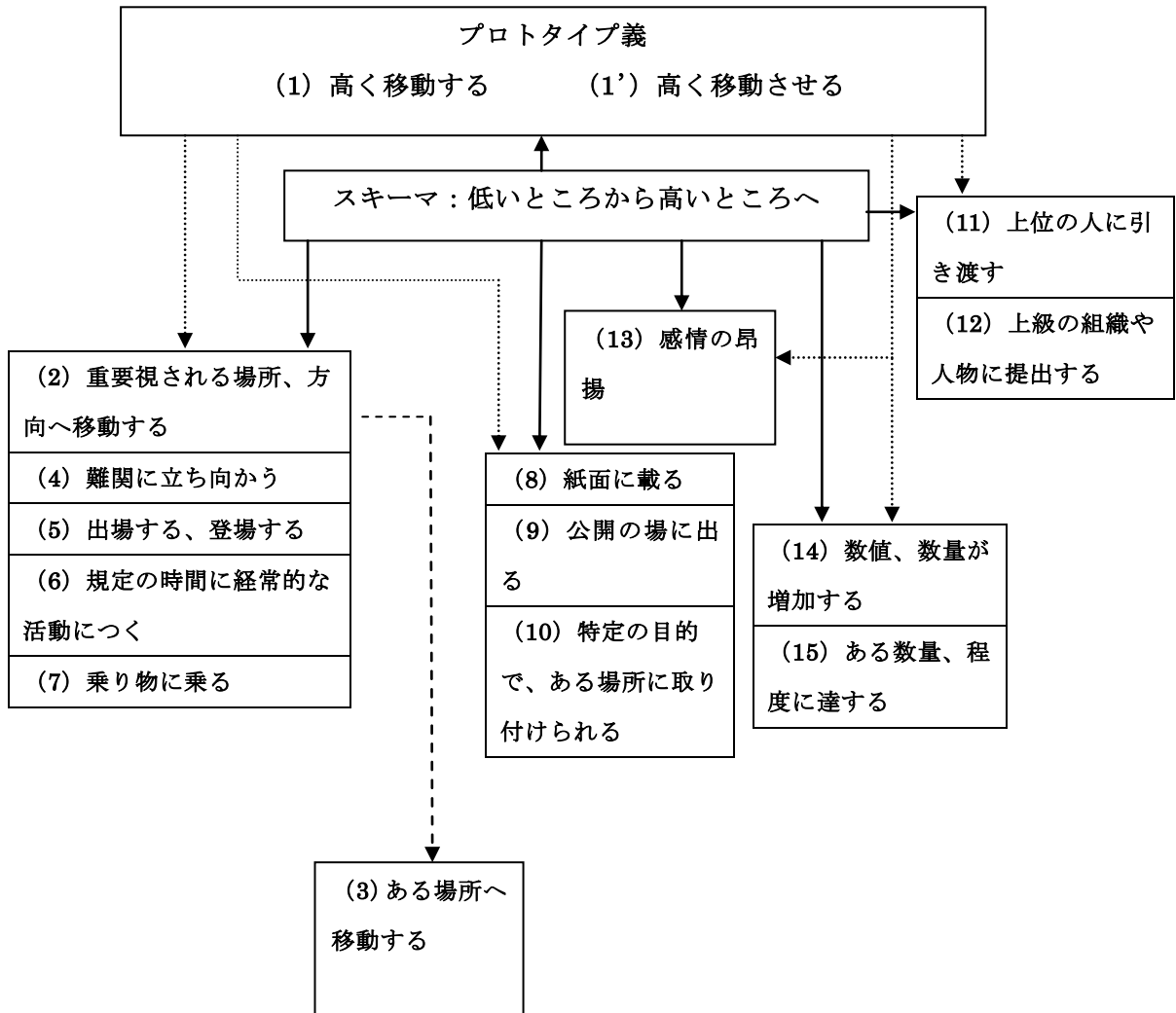


図1では、太線の矢印は“上”のプロトタイプ義と5つの派生的意味群とはスキーマを共通点とした類似関係にあることを表わす。点線の矢印はプロトタイプ義から5つの意味群への、メタファー的関係をもとにした意味拡張を表わす。破線の矢印は意味(2)義から、意味(3)へのシネクドキー的關係をもとにした意味拡張を表わすものである。

(3) 中国語の“上”における背景の意味による意味拡張

(I) メトニミー(換喩)的拡張義

ここでいう「背景の意味」とは、ある語のプロトタイプ義では、活性化されていない、背景として存在する意味のことを指す。前に紹介した国広氏が提唱する「現象素」に相当するものである。つまり、ある事象について、プロトタイプ義では、その事象の一つの段階、或いは側面が前景化されるが、「背景の意味」による拡張義では、その事象のほかの段階、側面に焦点を当てることになる。このように、一つの事象の違う段階、側面に焦点を絞るような意味カテゴリーは、メトニミー的關係を持っている。このような意味拡張は、「メトニミー的意味拡張」と呼ぶ。



“上”において、プロトタイプ義は「高いところへの移動」という方向性が前景化されたもので、移動の様態、経路、到達点などは背景化されていると考えられる。ここで、意味（16）～意味（22）の6種を意味群 G、意味群 H、意味群 I の三つのグループに分けて考察することにする。

**意味群 G 意味（16）、意味（17）、意味（18）、意味（19）**

意味群 G の各意味カテゴリーは、メトニミー的意味で、“上”の主体は移動の主体と異なっており、それを移動させることを表わす表現からなる。特に、プロトタイプ義の背景にある「移動して、移動先に残る」という「到達点での存留」義と「結びつき」義の活性化が見て取れる。この二つの背景の意味の活性化によって、プロトタイプ義から意味群 G がメトニミー的意味拡張をしてきたものである。また、“上门”、“上表”のように、部分と全体関係のメトニミー表現が拡張される。

なお、意味群 G の各カテゴリーの意味構造と構文構造の特徴を表で示すと、次の通りになる。

表8 “上”の意味群 G の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上”のスキーマ的意味の有無	背景の意味の前景化	“上”の他/自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の類型
（意味16）取り付ける	×	移動の到達点、到達点での存留、硬く結びつく	他動性動詞	移動の主体、取り付けられる部品類	（意味1）からのメトニミー的意味拡張
（意味17）表面につける、塗る	×	移動の到達点、到達点での存留、硬く結びつく	他動性動詞	移動の主体、液体、膠質	（意味1）からのメトニミー的意味拡張
（意味18）加える、施す、増やす	×	移動の到達点、到達点での存留、硬く結びつく	他動性動詞	移動の主体	（意味1）からのメトニミー的意味拡張
（意味19）締める、巻く	×	硬く結びつく（締められる）	他動性動詞	ゼンマイ上のもの	（意味1）からのメトニミー的意味拡張

### 意味群 H 意味 (20)

意味群 H の意味カテゴリーは、メトニミー的意味で、“上”の主体は移動の主体と一致しており、受動的な移動及び移動の到達点がマイナス評価の結果であることを表わす表現である。意味(20)「罨に引っかかる」義では、“上圈套”、“鱼上网”のように、主体がある特定の場所、道具まで移動し、その場所(道具)に引っかかって、離れられないことを表わす。移動の出発点と経路が背景化されるが、到達点が前景になっている。そしてその到達点となる場所(道具)が罨などの仕掛けられたもので、引っかかると容易には離れないものであるため、移動主体と到達点の道具の両者が結びつくことも含意される。ここから、意味(20)は、プロトタイプ義の「到達点での存留」義と「結びつき」義の二つの背景的意味をもとにしたメトニミー的意味拡張であることが分かる。この意味カテゴリーを意味群 H とするが、その意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りになる。

表9 “上”の意味群 H の各意味カテゴリーにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上”のスキーマ的意味の有無	背景的意味の前景化	“上”の他/自動性	“上”の目的語の意味	意味拡張の種類
(意味 20) 物や人の状態が変化する	×	移動の到達点での存留、硬く結びつく	自動性動詞	到達の場所、引っかかる道具	(意味 1)からのメトニミー的意味拡張

### 意味群 I 意味 (21)

意味群 I の意味カテゴリーは、状態変化を表わすメトニミー的意味であり、“上”の主体は変化の主体と一致している。意味(21)「物や人の状態が変化する」義では、状態が変化し、そして変化後の状態であり続けることを表わす。とりわけ変化した後の状態が持続することが前景化されていると言える。この意味用法は各カテゴリーのうち、「高く移動する」というスキーマ的意味要素はほとんど含意されないため、最もプロトタイプ義からの独立度が高く、しかもプロトタイプ義の「移動」とは、性質の異なる「状態の変化」を表わすが、「結果義」というプロトタイプ義の最も背景化された要素にだけ焦点を絞り、拡張された意味カテゴリーである。なお、「意味群 I」の意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りになる。

表 10 “上” の意味群 I の各意味カテゴリにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上” のスキーマ的意味の有無	背景的意思の前景化	“上” の他/自動性	“上” の目的語の意味	意味拡張の種類
(意味 21) 物や人の状態が変化する	×	状態の変化 変化後の状態の維持	自動性動詞	物理的、生理的、心理的状态	(意味 1) からのメトニミー的意味拡張

**意味群 J 意味 (22)**

意味群 J の意味カテゴリーは、“上” の主体は上位にあると見られるもので、移動とは関係なく、主体の能動的行為を表わす表現である。意味 (22) 「目上、年配者の行為を指す」義は方向性から見れば、目上、年上など尊敬すべき人物を「上」と見なすことから、その人物の行動に言及する場合でも、“上” を用いて表わす。これが隣接関係を持つ事物によるメトニミー的意味派生である。「意味群 J」の意味構造と構文構造を表で示すと、次の通りになる。

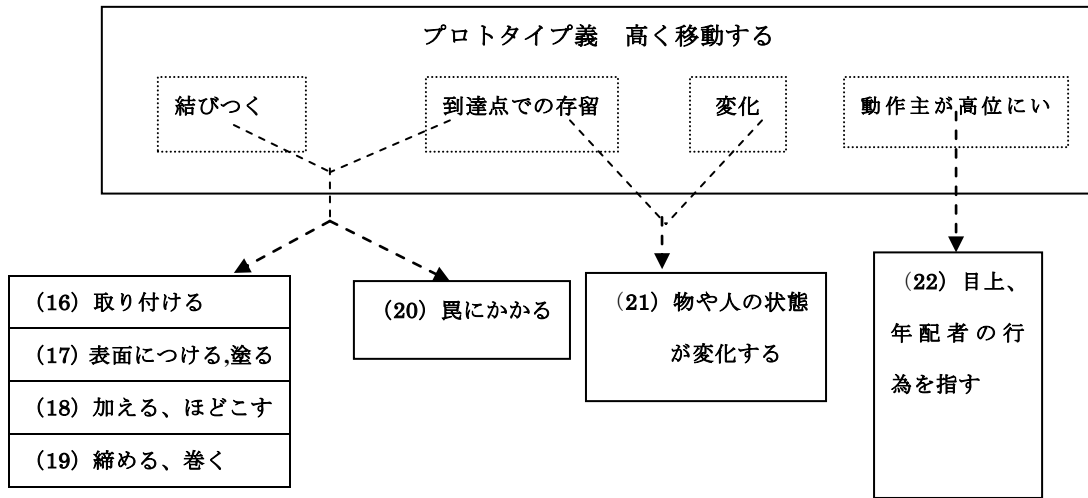
表 11 “上” の意味群 J の各意味カテゴリにおける意味構造と構文構造

意味カテゴリー	“上” のスキーマ的意味の有無	背景的意思の前景化	“上” の他/自動性	“上” の目的語の意味	意味拡張の種類
(意味 22) 目上、年配者の行為を指す	×	動作主が尊敬すべき人物である	自動性動詞	動作の対象、関わるもの	(意味 1) からのメトニミー的意味拡張

(II) 背景的意思による意味拡張ネットワーク

以上のように、プロトタイプ義から背景的意思によって拡張されてきた七つの意味カテゴリーを四つの意味群に分けて、考察した。その意味拡張ネットワークを次の図 3 で示すことにする。

図 2 背景的意思による“上”の意味拡張ネットワーク



上記の図 2 において、「高く移動する」はプロトタイプ義としての“上”における前景化されている意味を表わし、点線の囲いはプロトタイプ義で背景になっている意味を表わす。これらの背景的意思によって、メトニミー的な意味拡張が成立する。破線の矢印はこのようなメトニミー的な意味拡張を示すものである。

以上のように、本節では、中国語動詞“上”の意味カテゴリーを 22 種にまとめた。そして意味拡張モデルを利用し、22 種の意味カテゴリーをプロトタイプ義、スキーマによるメタファー的拡張義、スキーマによるシネクドキー的拡張義、そして背景的意思によるメトニミー的拡張義に分類し、それぞれの意味拡張ネットワークを解析してきた。

“上”の意味カテゴリー 22 種を意味拡張の種類と各類型の意味構造を表 11 でまとめておくことにする。

表 11 “上”の各意味群の構文構造と意味構造

意味拡張の種類	意味カテゴリー	意味拡張の根拠	“上”のスキーマ的意味の有無	背景的意思の前景化
メタファー的意味拡張	意味群 A, B, C, D, E	意味 (1) とのスキーマを類似点とする類似関係	○	移動の方向、到達点
シネクドキー的意味拡張	意味群 F	意味 (2) との下位種と上位類の関係	×	移動の到達点
メトニミー的意味拡張	意味群 G, H, I, J	意味 (1) の背景的意思を焦点化したメトニミー的關係	×	移動の到達点での存留、結びつく

#### 4. 結論

本章で中国語の動詞“上”の意味を 22 種のカテゴリーに分類した。従来の研究、辞書の意味項目では提起されていないが、「特定の目的で、ある場所に取り付けられる」義（上膛）、「感情の昂揚」義（上火儿）、「数値、数量の増加」義（血压上来了）、「物や人の状態が変化する」義（上瘾）の 4 種が独立した意味として成立すると筆者は主張している。改めてその理由を挙げると同時に、“上”の意味用法における特徴を確認することにする。

「特定の目的で、ある場所に取り付けられる」義の用例（“上膛”、“上脚”など）は、「取り付ける」義の項目に取り入れることが多いが、下記のような特徴が見られるため、独立した意味カテゴリーとすべきだと筆者は主張する。

a “上膛”のように、動作主である人は明示されることなく、“上”の主体は取り付けられる対象となる。このように、主体が受動的な移動でありながら、能動的な自動詞で表現されるのは、同じ意味群の「紙面に載せる」義と「公開の場に出る」義と同様であるが、「取り付ける」義とは異なっている。

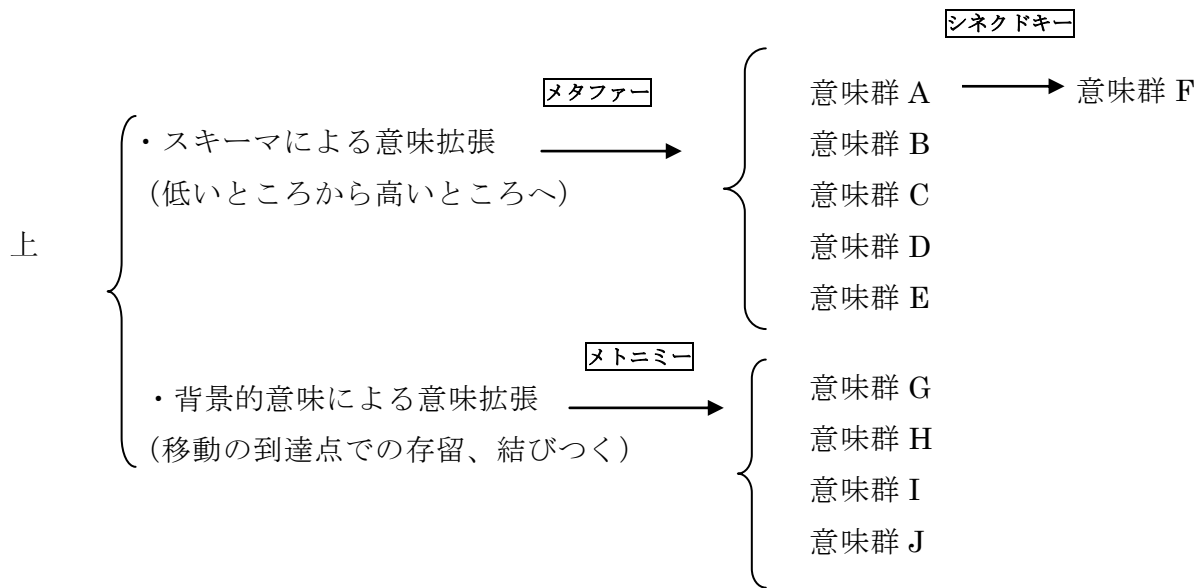
b “上”に後続するものは、意味 (16) のように、取り付けられる部品類を表わすものでもなければ、意味 (5)、意味 (9) のように、場所を表わすものでもない。部品類が取り付けられた具体的な場所、主として道具を表わすものである。

c 背景義としての移動の目的が強調され、“上膛”は「銃が発砲できる状態になる」ことを意味するように、移動によって完備された状態になることを表わす。

また、「感情の昂揚」義及び「数値、数量の増加」義は、プロトタイプ義の「高く移動する」義とは、具体的移動と抽象的移動の関係にある。「気持ちの高ぶり」は「上」、「数量の多いこと」は「上」であるなどのメタファーが前提条件として認められており、ほかの各種メタファー的派生義に比較すれば、心理的な上位に向かって移動するより、主体自身が器の内容物のように、量の増加につれ、メーター数字が上にあがっていくことと見なしてよい。

なお、前述したように、「物や人の状態が変化する」義は、“上”のスキーマ的意味要素「低いところから高いところへ」ということはほとんど含意されないので、各意味カテゴリーのうち、最もプロトタイプ義からの独立度が高く、また、性質の異なる「状態の変化」を表わすものであるため、「結果義」というプロトタイプ義の最も背景化された要素にだけ焦点が絞られる。構文上においても、“上”の後につくのは“冻”、“锈”、“瘾”、“火”のような抽象的状态を表わすもので、ほかの意味カテゴリーで多く見られる「場所」類とはかなり異なっていることが分かる。

図3 中国語の動詞“上”における意味カテゴリーのメカニズム



以上、本稿は新たな4つの意味カテゴリーの提起を含め、中国語動詞「上」における意味カテゴリーをまとめたうえで、その意味拡張のプロセスを「意味拡張モデル」を用いて「スキーマによる意味拡張」、「背景の意味による意味拡張」、さらに、「メタファー的」、「シネクドキー的」、「メトニミー的」な意味拡張メカニズムの解明を試みた。認知言語学の理論による多義語研究、そして、中国語教育に貢献したいと思う。

注

- 1 初山洋介「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」(『認知言語学論考』No.1 ひつじ書房 2001年9月 p.32-p.48)
- 2 「現象素」については、国広哲弥によって以下のようにまとめられている。「語の用法と結びついた外界の現象・出来事・物・動作など、感覚で捉えることのできるもので、言語外に人間の認知の対象として認められるものである。同じ現象素を共有することが多義語のまとまりを認定する基準となる。」国広哲弥『理想の国語辞典』(大修館書店 1997年11月)
- 3 『中日辞典』(北京商務印書館・小学館 1992)、『現代漢語詞典』(商務印書館 1979)、『動詞大辞典』(中国物资出版社 1990)、『中国語常用動詞例解辞典』(日外アソシエーツ 1995)、『中日大辞典・増訂第二版』(大修館 1987)、『中華古漢語字典』(上海人民出版社 1997)、『中国語大辞典』(角川書店 1994)、『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社 1986)
- 4 G・レイコフ、M・ジョンソン『レトリックと人生』(渡辺昇一、楠瀬淳三、下谷和幸訳 大修館書店 1986年2月)

参考文献

- 于康 (2006) 「『V上』中的『上』的義項分類与語義擴展機制」『言語と文化』: 9  
19-34, 関西学院大学言語教育研究センター
- 孟琮編 (2000) 『漢語動詞用法詞典』商務印書館
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Stanford: Stanford University Press
- 羽山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」『認知言語学論考』No.1  
32-48, ひつじ書房
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- G・レイコフ M・ジョンソン (1986) 『レトリックと人生』(渡辺昇一、楠瀬淳三、下谷和幸訳) 大修館書店
- 『中日辞典』(1992) 北京商務印書館・小学館
- 『現代漢語詞典』(1979) 商務印書館
- 『動詞大辞典』(1990) 中国物资出版社
- 『中国語常用動詞例解辞典』(1995) 日外アソシエーツ
- 『中日大辞典・増訂第二版』(1987) 大修館
- 『中華古漢語字典』(1997) 上海人民出版社
- 『中国語大辞典』(1994) 角川書店
- 『漢語大詞典』(1986) 漢語大詞典出版社
-